

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)

<https://amda.or.jp/>

特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構

<https://www.amda-minds.org/>

特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター

<https://www.amdamedicalcenter.com/>AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

2025 年 10 月 25 日 VOL.48 第 315 号

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1 2025 年

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail: member@amda.or.jp

秋 号

秋

救える命があればどこまでも

AMDA Journal インタビュー

柔軟に対応できる“雑草型人材”の育成を重視

AMDA 理事 沖 陽子 先生

今回の AMDA インタビューは、今年 AMDA の理事に就任した岡山県立大学前学長の沖陽子先生です。(聞き手：あるちゃん ジョシ)

AMDA AMDA と出会ったきっかけをお聞かせください。

沖 私が岡山県立大学（以下、県大）で副学長を務めていた頃、菅波前理事長とのご縁がきっかけで AMDA と出会いました。その後、2010 年には県大と AMDA が包括協定を締結し、国際協力や人材育成などで交流を深めました。さらに 2013 年には総社市を加え、三者協定を結びました。これは、「災害支援、地域連携、地域貢献」を柱とし、南海トラフ地震のような大規模災害への備えも視野に入れたものです。私の任期中に具体化することはできませんでしたが、こうした取り組みは今後の発展に向けた大きな礎となっています。

そして 2017 年 12 月には、『AMDA こども食堂支援プラットフォーム』に顧問として参加しました。発足式の際には、県大の学生自治組織である支援団も会場整備などに積極的に関わり、学生にとっても貴重な経験となりました。

AMDA 学長として県大の学生にどのような学びを望まれていたのでしょうか。

沖 学生には“受け身ではなく主体的に考え行動する力”と“国際的な視野”を育んでほしいと考えてきました。その思いを強くしたのは、総社市の防災訓練で学生の参加が乏しかった経験です。その直後に西日本豪雨災害が発生し、県大の職員や学生が AMDA や市と連携して活動を行い、大きな役割を果たしました。この経験から“待ち”ではなく主体性が災害対応に不可欠であると知り、体制づくりの重要性を痛感しました。そこで学生が考え、行動する場として『吉備の杜創造戦略プロジェクト』を立ち上げ、地域創生に資する学びを推進しました。さらに AMDA の協力によるネパールの市長らの訪問や国際支



援活動を通じて、学生が小さな一歩から国際的な視野を広げる機会を得ることができたと思っています。

AMDA 災害時における県大と AMDA との連携についての考えをお聞かせください。

沖 県大は立地条件や広大な敷地、多くの人材という強みがありながら、防災や救援活動への意識は十分ではなく、近隣自治体に頼る面もありました。しかし、大規模災害時には、大学自らが市民を支える力を備える必要があります。在任中、吉備の杜創造戦略プロジェクトにおける課題解決型学習を通じて行政や企業と連携し、学生が防災課題を考える機会を設けました。また、教員も専門領域を

活かして防災研究に取り組み、災害に対する備えへの意識が広がりつつあります。さらに、平時は交流拠点、有事には避難、指令、生活支援の機能を担う“防災機能を備えた施設”の構想を温めており、AMDA や自治体と連携しながら具体化することで、大学は地域の防災拠点として重要な役割を果たせると考えています。

AMDA AMDA の理事として、これからの活動への想いをお聞かせください。

沖 私はこれまで研究や教育の場で、常に現場を重視し、学生には、“現場こそが最大の先生である”と伝えてきました。こうした姿勢は AMDA の理念である「現地主導、パートナーシップ、相互扶助」にも重なっていると思います。特に変化の激しい時代に柔軟に対応できる“雑草型人材”の育成を重視し、学外の立場から、大学や自治体、企業と AMDA をつなぎ、災害支援や国際協力の場で動ける人材を育てたいと思います。

フィリピン洪水緊急支援活動

7月中旬から続いた熱帯低気圧の影響により、首都マニラのあるフィリピンのルソン島では洪水や地滑りが発生。これを受け、AMDA フィリピン支部が中心となり、緊急支援活動が行われました。

7月25日、深刻な被害を被ったバレンズエラ市で医療支援を実施し、計750人を診察しました。支援を行った4ヶ所の避難所の1つ、バレンズエラ高校では、子どもたちを対象としたレクリエーション活動や炊き出しも行われ、総勢830人が参加しました。

また9月7日には、長引く災害の影響に対応するため、サン・イルデフォンソ市バスケットにて支援を行いました。診察から衛生教育に至るまで、包括的な医療支援を実施し、軽食と飲料水を配布しました。



医療支援の際、熱や咳といった風邪の症状や、水害に起因する感染症が多く見られました。また避難生活により慢性疾患が悪化したケースや、精神的な不安を訴える例も見られました。子どもと診察に訪れた母親は、「洪水で水位が上がるのが非常に速く、どこに逃げればいいのかわからなかった」と振り返りました。AMDA フィリピン支部長のダビロ医師は、今回の支援活動を通じて、「自分たちが被災地に駆けつけ、共感を示すことが被災者にとって最大の癒しになることを再認識した」と語りました。(岩尾 智子)



インド・ブッダガヤ洪水緊急支援活動

8月22日、インド・ブッダガヤ郊外を流れるファルグ川が氾濫し、川沿いの村では家屋の多くが全半壊する甚大な被害が発生しました。これを受け、現地で母子保健事業を行うAMDAは26日から被災地の調査を開始。食糧支援に対するニーズが高く、衛生面における課題が露見したため、支援を決定しました。

9月8日、被害の大きかったゴンガリア村で、75世帯を対象に一週間分の食糧を配布し、住人に対して、煮沸の重要性など、安全な飲料水の確保について説明しました。

村民の一人は、「冬が到来する前に早く家の修繕を進めたい。被災してから出稼ぎに行き、食料品や修理用資材の購入を繰り返しているが、おかげさまで浮いた食費を資材に回せることになった。出稼ぎに行く必要もなくなったため、家の修理に専念できる」と語りました。



12日には、ゴンガリア村とバタスプール村に住む、約600人に蚊帳、生理用ナプキン、ビスケットを配布しました。蚊帳は、洪水以降、蚊の増加が見られたことから、デング熱やマラリア等の流行に配慮して提供されました。一方、洪水で生理用品を流されてしまった女性たちは、古布で対応せざるを得ず、以前から使用していたナプキンを必要としていました。

AMDAは、今後も被災地の状況を注視していきます。(岩尾 智子)



AMDA インドネシア支部が大規模地震災害に関するセミナーを開催

7月19日、AMDA インドネシア支部は、同国スラウェシ島マカッサルにあるハサヌディン大学にて、大規模地震災害に関するセミナーを開催しました。



当日はAMDAの前身であるAMSA（アジア医学生連絡協議会）のメンバーを含む100名以上が参加し、冒頭では、AMDAの菅波前理事長が津波予測と備えについて講演を行いました。地震と津波がもたらすそれぞれの被害の特徴を説明しながら、「被災地での支援を通して生まれる相互扶助の精神こそが、人々の希望につながる」と語りました。

続いて、ハサヌディン大学の副学長や現地の人道支援団体による、地震のメカニズムや災害対応に関する発表が行われ、活発な意見交換が行われました。セミナーの締めくくりには、AMDA インドネシア支部と現地の緊急医療ボランティア団体『Indonesian Emergency Health Volunteers Communication』との間で協力協定が結ばれ、新たな防災ネットワークの構築に向けて大きな一歩を踏み出しました。(難波 妙)

QRコードから当日の様子をYouTubeでご覧いただけます→



モンスーン被害を受けた『お年寄りの家』修繕工事完了のご報告

AMDA の現地協力団体が運営する、インド・ブッダガヤにある老人ホーム『お年寄りの家』は、2025 年 6 月のモンスーンによる暴風雨で、台所と牛舎が深刻な被害を受けました。

調理場を失ったため、食事の準備が困難となり、また牛も雨風にさらされる状況に置かれました。施設で飼育している牛のミルクは入居者にとっての栄養源であり、また余剰分を販売して運営費に充てているため、施設の大切な収入源となっています。

現地のみでの修繕が難しかったため、施設の設立者であり、AMDA ピースクリニックの元スタッフでもあるベータ氏より、AMDA に支援要請が寄せられました。皆様からの温かいご支援により修繕工事を迅速に開始でき、8 月末に無事完了いたしました。

新しい台所では再び温かい食事が提供されています。牛舎も再建され、牛は雨風が凌げる環境で過ごせるようになりました。酪農収入も回復し、施設運営の安定にもつながっています。皆様の温かいご支援は、施設で暮らす 24 名のお年寄りの暮らしを支える大きな力となりました。心より感謝申し上げます。(あるちゃん ジョシ)



～ 採れたて野菜を配布 ～ (インド・AMDA ピースクリニック)

インド・ブッダガヤにある AMDA ピースクリニック (APC) で母子保健事業を展開する AMDA は、農業事業として、郊外で野菜、果物、米を育てています。収穫した農作物の一部は、APC を利用する母親たちに配布されるほか、マタニティークラスで提供される軽食にも使われています。また地域コミュニティを中心に無料で食事を提供する『AMDA あおぞら食堂』の食材としても利用されています。

毎週水曜日に開催されているマタニティークラスでは、健康教育や栄養プログラムを行っています。参加者のスマン・クマリさんは、採れたてのオクラを受け取り、次のように話しました。

「妊娠初期から APCに通っていますが、ここに来ると気持ちが安らぎます。スタッフと話せる上、クラスに参加することで、たくさんのお母さんたちと友達になれました。おしゃべりをしていると、自然と笑顔になり、ストレスを忘れてしまいます。幸せな時間です。今日、帰り際にスタッフから『洪水で被災した地域の女性たちに生理用ナプキンを配布するので、梱包を手伝ってほしい』と声を掛けられました。私を含め多くのお母さんが協力して作業を行い、良い経験になりました。お金での支援はできなくても、少しでもお役に立てたことが嬉しかったです。さらに、新鮮な野菜までいただき、ありがとうございます。ここで人と助け合いながら過ごせること、そして、支えてくださる皆さんに感謝しています」



生理用ナプキンの梱包作業



農業事業で収穫された野菜



マタニティークラスの様子

2014 年の開始以来、APC の母子保健事業は、多くの方々に支えられてきました。(株) フェリシモ様には、2023 年より『Her smile 基金』を通じて、継続的なご支援をいただいています。

応援してくださる方がいることは、AMDA 本部ならびに現地のスタッフにとって、大きな励みとなっています。皆様からの温かいご支援に重ねてお礼申し上げます。AMDA では、現地の厳しい環境下で暮らす女性たちが安心して妊娠期・産褥期を過ごせるよう、これからも活動を継続していきます。

(岩尾 智子)

ウクライナ人道支援活動



ウクライナにおける現地協力医療機関の1つに、AMDAが2022年より継続的に支援しているセントミッシェル小児総合リハビリセンターがあります。この病院には、ダウン症、自閉症、側弯症はもとより、身体や精神、知的機能に障がいを持つ子どもたちがリハビリを受けに集まっています。

比較的安全な西部トランスカルパチア地方にあるこの病院では、戦闘地域から避難してくるリハビリが必要な子どもとその家族に手を差し伸べてきました。

今年8月に行ったオンライン会議では、同センターのディレクターより、東

部の戦闘地域ドニプロ出身の17歳になる少年の事例が報告されました。

「小児性脳性麻痺と診断されている彼は、歩行ができず、手足もほぼ動かない状態でした。昨年と今年、それぞれ1ヶ月間、センターに滞在し、リハビリを受けました。馬が大好きな彼は、厩舎の近くで、『見せたいものがある』と私たちに誘い出しました。そこに行ってみると、彼が自分の手で、一生懸命ハートのジェスチャーを作ってくれたのです。手を動かすことすら困難であるにも関わらず、それを見せてくれたこと

にととても感動し、その様子を思わず写真に収めました」(ディレクターの話)



AMDAからの支援は、物価高にあえぐ生活困窮者や避難者への食糧支援、ならびにがん患者への医療支援に活用されているほか、センターで使用する清掃用具の購入や光熱費、支援活動用車両のガソリン代などに充てられています。

同センターを通じて、AMDAはこれからもウクライナで困難な生活を送る方への支援を継続していきます。

(岩尾 智子)



ウクライナ産ワインの販売に併せて AMDA の活動紹介パネルを展示

9月3日から23日までの期間、岡山高島屋地下2階特設会場にて行われたウクライナ産ワインの販売に併せて、AMDAが2022年から継続しているウクライナ人道支援活動の活動紹介パネルを展示していただきました。

多くの方が行き交う場所に設置していただいたことで、幅広い方々に AMDA の活動を知っていただく貴重な機会となりました。AMDA では、今後も企業や団体とのパートナーシップを大切に、活動を展開してまいります。

(金高 摩耶)



現在ご寄付受付中の活動

- ・緊急救援
- ・ウクライナ人道支援
- ・AMDA フードプログラム
- ・ルワンダ学校保健
- ・カンボジア
- ・インドピースクリニック
- ・ネパール医療支援
- ・内視鏡技術移転
- ・東日本大震災
- ・こども食堂支援
- ・AMDA 中高生会
- ・災害事前対策

AMDA 中学高校生会 神戸研修

8月6日、AMDA 中学高校生会は神戸研修を実施し、メンバー 12 名が神戸市にある『人と防災未来センター』を訪問しました。

今年で発災から 30 年を迎えた阪神・淡路大震災について、資料や映像を通じて学び、体験型の施設では災害発生時のシミュレーションも体験しました。

参加したメンバーからは、「これまでは今後起こりうる災害を想定して防災について考えてきましたが、今回の研修を通して過去の災害を知り、その教訓から学ぶことも大切だと感じました」「“防災”という考え方だけではなく、災害による被害を少しでも減らすために行動する“減災”という考え方が印象に残っています」といった声が聞かれました。

研修後にはメンバー同士で意見交換会を行い、学びをさらに深める有意義な時間となりました。



◆ AMDA 中学高校生会 30 周年記念同窓会を開催します！◆

1995 年に設立された AMDA 中学高校生会は、今年で 30 周年を迎えました。これまで活動に関わってくださった皆様への感謝の気持ちとともに、この節目をお祝いするため、30 周年記念同窓会を開催いたします。現役メンバー、OB・OG、関係者の皆様が集い、思い出を分かち合い、世代を超えたつながりを深める機会となれば幸いです。

OB・OG の皆様へは、登録当時の情報をもとにメールにてご案内をお送りしていますが、一部ご連絡が届かない場合がございます。お知り合いに OB・OG の方がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけいただけますと幸いです。また、AMDA 公式 SNS でも本同窓会に関する情報を発信しておりますので、拡散のご協力もよろしくお願いいたします。

《開催概要》

- ・日時：2025 年 12 月 28 日（日）18:30～20:30（18:00 受付開始）
- ・場所：杜の街グレース MORINOMACHI PICNIC TERRACE 3F

《参加対象》

- ・1995 年から 2025 年の間に AMDA 中学高校生会（高校生会）に在籍していた方

■ご不明な点はお気軽にお問い合わせください。 TEL：086-252-6051（平日 9：00～18：00）



AMSA Japan が AMDA 本部を訪問

8月18日、*AMSA Japan のメンバー 4 名が AMDA 本部を訪問しました。佐藤理事長を中心に現場での活動経験が共有され、若い世代とのつながりを深める貴重な機会となりました。

ミーティングは 3 時間半にわたり、これまでの両者の歩みや、医学生立場から AMDA の活動に参加する可能性、AMDA 中学高校生会を含む世代を超えた協力のあり方など、多岐にわたる意見交換が行われました。

AMSA のメンバーからは「今後、AMDA との連携をより一層強化し、緊急支援活動時にはぜひ一緒に活動できるよう体制を整えていきたい」と力強い言葉が寄せられました。また、世代を超えた交流の第一歩として、12 月には、『AMSA Japan × AMDA 中学高校生会 オンライン交流会』の開催を予定しています。活動紹介はもちろん、比較的年齢の近いメンバー同士が互いに刺激し合える時間となることを期待しています。今後も、次世代を担う若者たちとともに国際協力の輪を広げてまいります。（金高 摩耶）



※ AMSA（アジア医学生連絡協議会）とは：AMSA は、1980 年に当時医学生だった菅波茂・前 AMDA 理事長が立ち上げた、アジアの医学生を中心とする学生団体です。母体である AMSA International の活動は拡大を続けており、現在はアジア各国に支部が設立されています。所属メンバーは延べ 4 万人にのぼるといわれています。

使わないで眠っている年賀はがき、官製はがき、切手はありませんか

はがき、切手は未使用のものであれば、古いものでも差し支えありません。ご協力よろしくお願いいたします。

書き損じはがき、未使用切手等を
右記までお送りください

〒700-0013
岡山県岡山市北区伊福町3-31-1
特定非営利活動法人 アムダ
「書き損じはがき・切手」担当 行



おかやまコープと AMDA 大槌健康サポートセンターによるオンライン交流会



東日本大震災復興支援として長年 AMDA をご支援くださっているおかやまコープ様と岩手県大槌町にある AMDA 健康サポートセンターとのオンライン交流会が 9 月 9 日に開催されました。おかやまコープからは計 37 名が岡山県内のサテライト会場や自宅から参加し、大槌町の健康サポートセンターからは 3 名の利用者が参加しました。

はじめに、健康サポートセンターの佐々木賀奈子センター長に作り方を教わりながら、双方の参加者が一緒になって、大槌町の貝殻を使った可愛いストラップを作成しました。

東日本大震災で自身も被災した佐々木センター長は、鍼灸師として避難所で災害鍼灸支援活動に関わって以来、AMDA の復興支援事業に携わっています。後半は健康サポートセンターで行わ

れている木工や手芸、さをり織りの教室、健康増進セミナー等についてお話いただきました。また大槌町で行われている、豊かな海を取り戻す為の藻場再生の取り組みや、現在の町の様子について、スライドを交えた紹介が行われました。

<参加者からの声>

「とても可愛いストラップができました」

「毎年、このような手作り体験を続けていってほしいです」

「海の砂漠化とウニのお話がとても気になりました」

「復興には時間がかかるけれど、忘れずに応援したい」

「大槌と岡山のつながり、ずっとずっと続けていきましょう」

(太田 浩子)



AMDA 職員が徳島県美馬市の防災訓練に参加

8 月 4 日ならびに 9 月 1 日、AMDA 職員 2 名が徳島県美馬市で行われた一連の防災訓練に参加しました。AMDA と大規模災害時の支援に関する協定を締結する美馬市は、*AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォームにもご参加いただいています。今回は、同プラットフォームの運営委員長で医療法人『芳越会』の理事長を務める林秀樹医師からご案内をいただき、災害時にスムーズな連携が図れるよう訓練への参加を決めました。

8 月 4 日に行われた災害対策本部運営訓練では、“午前 11 時に南海トラフ地震が発生した”という想定で、美馬市の災害対策本部が立ち上げられ、消防、警察、保健所、医師会、社会福祉協議会など、地元の関係諸機関から職員（リエゾン）が集結しました。AMDA は、“発災直後に美馬市から支援要請が入った”という想定のもと、徳島県外から

の支援団体という立場で訓練に参加しました。

また 9 月 1 日に行われた災害図上訓練では、災害時、地元医師会チームと介護福祉チームが各自でどのような活動体制をとるかを検討した後、チーム間での効果的な連携について話し合いが行われました。

AMDA は、今後も南海トラフ災害に備え、顔の見える関係を築き、連携を深められるよう、関係諸機関が行う訓練等に参加していきます。

(大西 彰)



* 高い確率での発生が懸念される南海トラフ災害に円滑に対応するため、AMDA では、同プラットフォームを基盤として自治体や医療機関、企業、NPO 等との連携強化を図っています。

子ども食堂と東日本復興支援事業への玉ねぎとジャガイモの寄贈

普段から自宅の畑で作った野菜を提供してくださっている岡山県津山市の立畠堅志さんが、今回は AMDA こども食堂支援プラットフォーム事業と東日本復興支援事業に、玉ねぎとジャガイモを 10 箱ずつ寄付してくださいました。AMDA では、これらを岡山県内の子ども食堂 10 団体と、宮城県気仙沼市で行われたイベント(下記参照)の来場者に配布しました。



■ AMDA こども食堂支援プラットフォーム事業

＜子ども食堂の利用者の声＞

「いただいた野菜で作ったカレーを夏に皆で食べました。子どもたちには、それらで調理したフライドポテトや、ジャガイモのあんかけが喜ばれました」



「食料品の物価高が続く中、このような支援物資は大変助かります」

＜子ども食堂の運営者より＞

「カレーに不可欠の玉ねぎをたくさんいただき、助かりました。ありがとうございました」

「大きくておいしそうなジャガイモだったため、調理する際、薄味にしてより素材の味を楽しんでもらえるよう心掛けました」

■ 東日本復興支援事業～宮城県 南町紫神社前商店街～

8 月 3 日、『気仙沼バル 2025 みなとまつりイベント』が宮城県気仙沼市にある南町紫神社前商店街にて行われました。パレードの後、ゴスペルコンサートや気仙沼吹奏楽団による演奏、子どもビンゴ大会などで盛り上がりました。イベント終了後、来場者には AMDA から寄付された野菜が配布され、大変喜ばれました。

(難波 比加理)



学生インターンの紹介：ノートルダム清心女子大学 難波 優希菜さん



7 月から 12 月初旬まで AMDA でインターンシップをすることになったノートルダム清心女子大学英語英文学科 4 年の難波優希菜さんに AMDA を志望した理由等を伺いました。

「AMDA をインターンシップ先として志望した理由は、海外支部と連携する姿勢が、将来目指している政府系機構と非常に関連性が高いと感じたからです。

AMDA では、海外支部との英語でのメール対応やミーティングへの参加、助成金申請資料作成など、重要な業務に携わらせていただきました。特に申請資料作成の際、AMDA ハイチ支部長とのメールでのやりとりを通して、子どもを含む多くの国内避難民が劣悪な環境の中での生活を余儀なくされている現状を

知り、胸が締めつけられました。その経験から、『私たちに何ができるか』と考えながら資料を作成しました。

また、世代や国境を超えて交流する場もありました。これまでも大学の授業やボランティア活動を通して、異なる背景や年代、さまざまな経験を持つ人々と関わってきましたが、AMDA での活動を通じて、相手の立場を尊重しながらコミュニケーションをとることの重要性を改めて実感しました。

こうした経験から、AMDA の活動の基本姿勢である“パートナーシップ”をより強く意識するようになりました。相手と同じ目線に立ち、ともに課題解決に向けて取り組むという姿勢が、将来どんな職場においても欠かせないものだと考えています。

私は、11 月にカナダで開催予定の模擬国連大会に大使役として参加します。世界各国から集まった学生と国際問題について議論し、問題解決に向けた決議案を作成する場においても、AMDA で培ったパートナーシップを活かし、会議を円滑なものにしたいです。

AMDA での学びを模擬国連での活動で実践し、さらに将来のキャリアや社会貢献にもつないでいけるように、残りの期間も日々の業務に取り組んでまいります」